



ひがしかくらちょう
北海道 東神楽町



東神楽町の概要

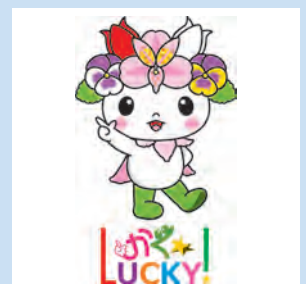
人口約35万人を擁する道北の中心都市旭川市に接し好立地環境にある東神楽町は、先端医療をはじめ高等教育、金融経済、道路交通など様々な都市的機能を楽しむことができる利便性の高い町です。面積は68・64㎢と小さな町ですが、人口は10,050人（平成25年12月末で、旭川市のベッドタウン化が進んでいると言えます。本町を含めたこの上川盆地一帯は、良質で食味の良いお米が作られる屈指の米どころとしても広く知られています。また、施設園芸作物と組み合わせた複合型農業も盛んです。

東神楽町は、平成元年から本格的な大規模宅地開発に着手し、今日まで飛躍的に人口を伸ばして来ました。約5,700人だった平成2年の人口が、平成12年には8,000人台、平成15年には9,000人を超え、明治27年の開拓から数え120年を迎えた平成25年10月には初めて、1万人に到達しました。また町内には、昭和41年に開港した道北の空の玄関である旭川空港が所在しており、首都圏はもとより台湾などアジア圏とつながる国際路線も通年運航しています。

このほか、本町は『花のまち』として全国的に知られています。平成12年の『全国花のまちづくりコンクール』では国内最優秀賞に輝き、それまでも幾多の成果を収めてきました。翌年には、カナダで開催された国際コンクールに日本を代表する自治体として参加するなど、昭和30年代後半から半世紀をかけ、暮らしや生活環境に花を取り入れた運動の成果が大きく開花、結実した瞬間でした。現在も、町のシンボルまた価値ある財産として、潤いある

みんなで築く活力あるまちづくりへ 『知のネットワークづくり』と『地区別まちづくり計画』

ご当地キャラクター



「かぐらっきー」

景観づくりに活かされ来訪者の心を捉えています。

旭川大学との連携による包括協定『知のネットワークづくり』

近年、行政や地域の課題は複雑化・多様化しており、その課題解決に向けた一つの方策として、貴重な知的・人的・物的資源や機能を有した大学との連携による地域の活性化が期待されています。

一方、大学においても少子化による学生数の減少のほか、大学改革をめぐる動きの中で厳しい競争と経営環境におかれ、積極的な地域貢献や地域と連携・協力した大学運営が求められています。

東神楽町では大学や研究機関等と連携して「知のネットワークづくり」という新たな活力や知恵を取り入れたまちづくりを進めるため、旭川大学との調整を進め、お互いのさまざまな資源や機能を活用する中で、教育・産業・福祉などの分野において協定を締結し、連携・協力していくこととしました。

①連携・協力の経緯

東神楽町が最初の連携・協力の相手として旭川大学を選定した理由は、以前から学長とのあいだに親交があり信頼関係が結ばれていたこともありましたが、旭川大学は隣市の旭川市に所在する地元の大学ということで、本町はもとより、圏域の現状や課題を充分把握し、理解していることなどによります。また、距離的に「近い」ということは、連携・協力を進めるにあたり、人的・物的な資源の移動など、時間やコストの面から考えて大きなメリットがあります。

旭川大学には2学部（経済学部、保健福祉学部）3学科のほか、大学院、短期大学部、地域研究所等があり、広範な分野での連携・協力が可能ということもあり、協定締結に先立ち、連携・協力が想定できる具体的な事業案について、職員からアイデアを募集するとともに、庁内に関係する課によるプロジェクトチームを立ち上げ、事業案や協定内容につい

て調整・推進することとしました。

プロジェクトチームでは、当面実施可能な事業の5つの柱として、(1)大学の教授等を町の事業の講師として招聘する、(2)大学の教授等を町の各種審議会・アドバイザー等として委嘱する、(3)大学の学生との連携・交流を進める、(4)大学の学生の実習等の受け入れ及び学習の場を提供する、(5)大学の研究活動への協力及び連携を図ることを掲げ、旭川大学と協議を進める中で基本合意に達しました。

協定書調印式は、平成24年8月21日に町関係者や旭川大学関係者が出席する中で厳粛に執り行われました。協定内容については、協力・連携項目が広範多岐にわたることから包括協定と



▶「協定書調印式」山本進町長(右) 山内亮史旭川大学長(左)

し、(1)まちづくりに関すること、(2)人材の育成に関すること、(3)教育、文化及びスポーツの振興に関すること、(4)地域活動の活性化に関すること、(5)健康及び福祉の向上並びに子育ての支援に関すること、の5項目を協定書に盛り込んでいます。

②具体的な取り組み事例

現在、連携・協力事業を推進するにあたり、東神楽町と旭川大学それぞれに連絡窓口を設置し、相互の連絡調整を行っています。プロジェクトチー



▶健康づくり学習の様子

ムで当面実施可能な事業として掲げた柱のうち、平成26年度の具体的な取り組み内容は、次のとおりです。

(1)大学の教授等を町の事業の講師として招聘

まちづくりの講演会、幼稚園の保護者研修、高齢者大学の健康づくり学習、企業や団体の職員研修の講師等として招聘し、地域住民の高度化・多様化する学習ニーズに応えています。

(2)大学の教授等を町の各種審議会・アドバイザー等として委嘱

情報公開・個人情報審査会委員、食育推進会議委員、子ども・子育て支援行動計画策定委員会委員、マスコットキャラクター選考委員会委員等への就任を依頼し、専門的な見地から意見をいただいています。

(3)大学の学生との連携・交流

大学や短大の各ゼミの学生が、子育て研修会において幼児向けにパネルシアターを実演するほか、福祉施設において高齢者のサロン活動に参加する中で交流を深めるなど、

子どもから高齢者まで幅広い住民から喜ばれています。

このほか、学生の保育実習の受け入れやゼミの研究活動の一環として、東神楽町の魅力のある地域や特色のある飲食店などを紹介する地域マップを作成するといった取り組みも始まっています。

③今後の課題

今後の事業展開としては、大学の



▶高齢者のサロン活動に参加する学生

人的な資源のみの活用ではなく、大学が持つ物的な資源や機能を有効に活用していくことが考えられます。

例えば、自治体と大学間における施設の相互利用の可能性も検討する余地があります。さらには、自治体だけではなく、町内の産業団体や企業、地域団体などの多様な主体との連携を誘導することで、町の特産品や企業の商品開発に参画するなど、大学の研究活動を地域にフィードバックしていくことも可能であると思われます。

現在、東神楽町と旭川大学との連携・協力は始まったばかりであり、今後、広範な分野における事業が展開されていくこととなりますが、さらに活動を深化させるためには、その有用性をお互いが認識できることが重要です。

初の試み「地区別まちづくり計画」策定

①町内7地区ごとの計画を本年度中に

東神楽町では平成25年度、道内自治体の行政計画ではあまり類例の見られない「地区別まちづくり計画」の策定に取りかかりました。選挙公約の一

つでもあり、同時に、平成25年度から始まった第8次東神楽町総合計画の実行に際し、町の自主自立に係る戦略的施策の一翼を担います。住む人の数はもとより、地域活動の手法や抱える課題が異なる町内7地区公民館単位に協議検討の母体を設け、住民と役場職員が対等な立場で議論を交え協働して計画を立てようとの試みです。

これを基盤に、住民自治や協働の視点の理解の上に立ってまちづくりが



▶「地区別まちづくり計画」住民と役場職員が議論を交わす様子

推進されることが期待されるとともに、総合計画が掲げる主要目標の一つである「連携と協働で築く自主自立のまち」の実効が図られ、狙い通りまちづくりの目指す姿が浮き彫りになることを希望しています。平成24年10月に開かれた地区公民館長会議で、7つの地区に初めてその全容が下ろされ理解と協力を求めました。

②ボトムアップ方式で論議を深め「協働」理念を実践化

自治体運営の基本となる総合計画の策定では、町内各界の代表や団体各



▶「ワークショップ」の様子

層から選ばれた検討委員会が設けられ、事務局から示された基本方針や論議の基礎となる素案を土台に意見の交換を重ね、住民の声を反映していく仕組みが一般的です。総合計画は、各種計画書が従属する形の行政計画の要で、民主的なルールに則った計画と位置付けられていますが、依然として官主導の態勢から脱却できていないのも実情である意味、岐路に立たされています。

しかし、今回の「地区別まちづくり計画」の策定では、行政ベースとは逆の流れのボトムアップ方式を採用し、総合計画のビジュアル化と実践化を図ることを重視しました。

同じ自治体でも、地区ごとで成り立ちや歴史が異なり抱える問題も当然違うことから、地域の実状を熟知した住民と中堅町職員が一体となって本音で話し、総合計画基本構想

との整合に配慮しつつ、課題の解決方法や役割分担、目指すべき目標を双方の理解を前提に創りあげていき、教本的性格の総合計画を動かし補完する実践的な効果の発揮を求めています。また、計画の策定作業を通じて住民と行政が相互の役割や責任を分担、確認



▶「ワークショップ」ひじり野地区

し、まちづくりに有益なことであれば自ら進んで取り組んでいくという具体的な行動段階の内容も盛り込んでいきます。

おわりに

東神楽町と大学との連携は、大学の教授等の知識や大学の機能はもとより、学生の若いエネルギーや斬新なアイデアは、地域の活性化に大きく役立つものと考えています。現在は旭川大学との包括協定を先行させていますが、今後はさらに他の大学や研究機関、民間企業等との連携・協力を視野に入れていきたいと考えています。

また、自治体では昨今、「住民と行政の協働（パートナーシップ）」によるまちづくり」という手法が多用されますが掛け声倒れに陥りやすく、職員、住民それぞれがそうした「協働」の理念の具現化を図っていくための導きと仕掛けは非常に重要で、今回の地区別まちづくり計画にも、その役割を期待しています。

東神楽町長 山本 進

（平成26年2月17日付第2870号）



石川県 能登町



地域に埋もれた資源に光を当て、 地域主導型の公民館活動の展開 〜能登町公民館特色ある活動事業を通じて〜



▲宇出津港から望める立山連峰

はじめに

当町は、平成17年3月1日、能都町・柳田村・内浦町が合併して誕生しました。能登半島の北東部に位置し、北は

能登町町章



「のっとりん」

公民館活動について

珠洲市と輪島市、南西は穴水町に隣接し、東と南は富山湾に面して海岸線が続き、海岸線の大半は能登半島国定公園に含まれています。平成25年現在合併8年目であり、多種多様な文化・行事・神事などの地域間交流、または世代間交流やネットワークを活かした取り組みなど、町の融和を図った施策が求められています。

当町には公民館が15館あり、それぞれ非常勤の館長1名、常勤の公民館主事1名が配置されています。この15館は、概ね小学校区ごと（閉校した小学校を含む）に公民館が配置されています。閉校した旧小学校舎をそのまま利用している公民館も少なくありません。また旧校舎の内5施設は、県内で

は珍しい公民館の「分館」として残されています。

各公民館では、文化・芸能・スポーツなどの各種教室やサークルのほか、地区の運動会や納涼まつり、敬老会の開催等、さまざまな活動を行っています。更に平成24年度から「公民館特色ある活動事業」がスタートしました。

これは各公民館が「地域の資源」を活かした活動を行うもので、奥能登に伝わる、「あえのこと」や「アマメハギ」などの伝承に関わる活動、環境や食をテーマにした活動、世界農業遺産を活用した活動など、すべての公民館で取り組んでいます。今後も全公民館で、特色ある活動事業を発展させ、活動の幅を広げたいと考えています。

公民館への支援

町からの支援は主に、予算と情報発信（広報誌、ホームページ、有線テレビ、メディアへの情報提供等）の2種類を行っています。特に前者については、平成24年度から公民館特色ある活動事業を新規に予算化しました。この事業は、1公民館当たりおよそ10万

円を目安に、地域の文化や神事、行事など、地域の特徴を活かした活動を公民館で行うものです。

平成24年度は、全15公民館19事業1、273千円を、平成25年度は、全15公民館19事業1、665千円を予算化しました。

公民館の事例紹介

公民館は、活動や交流の場だけではなく、地域の学びの場でもあります。町内15公民館下には、それぞれ特徴的な文化・神事・行事などがあります。これを地域づくりに活かすために、町は平成24年度から「公民館特色ある活動事業」を実施しています。その取り組みを通して、改めて公民館の意義や役割を伝えるため、ここでは、3つの公民館の事例についてリポートしましたのでご紹介いたします。

①秋吉公民館

（事業名：アマメハギ交流伝承事業）

「秋吉公民館の自慢は、地域の皆さんが公民館活動にとても協力的な

ことです」と語る竹中省三館長。平成25年度、特色ある活動事業に取りかかった。

蓑作りでも「原料となるわらの提供やねいご（稲の穂が付いていた部分）抜きを協力を呼びかけたところ、予想以上の協力が得られて本当に感謝しています」と目を細める。

毎年2月3日、鬼の面を付けた子どもたちが蓑をまこって家々を回るアマメハギは、秋吉公民館地区だけに伝



▶ツツノコ、コバセ道具を使った蓑づくり

わる伝統行事で国指定重要無形民俗文化財。しかし、蓑の文化が今も残るこの地域でも、編み方を知る人は途絶え、現存する蓑は年々傷みが激しくなっているという。「指導してくれる人がいるうちに、蓑作りを伝承しようと、ア

マメハギ保存会と話し合いました」竹中さんは町内で数少ない蓑編み技術を持つ堂下久子さん（78）に指導を依頼。住民18人が集まって協力しながら着の蓑を新調した。「やってみると非常



▶蓑づくり集合写真

に難しかったですが、参加者は熱心に協力的に取り組んでくれました。活動しながら、地域の文化を伝承していきたいという思いもさらに強くなりました」。秋吉公民館は平成25年度、地域との『協働』を掲げて活動している。裏作りも保存会との協働で取り組んだ。「公民館だけでできないことは、地域の皆さんと一緒にやります。公民館活動には住民の理解と協力が不可欠です。活動を通して意識をいかに変えていくか。その過程を大切に、これから活動を積み重ねていきたい」。長い年月で培われた住民と公民館の協力関係が、地域に活力を生んでいる。

② 鵜川公民館

（事業名…親子で作るうみみみにわか事業）

鵜川公民館は平成25年度、特色ある活動事業の予算を使って『ミニにわか』作りと鵜川地区の歴史を記したカレンダー制作に取り組んだ。「自分が住んでいる地域、育った地域に誇りと愛情を持ってもらいたい」と話す梅田真人館長。「自分が子どものころは、自作したミニにわかを引っ張りながら町内



▲ミニにわかの集合

を練り歩いていました」と振り返る。

ミニにわか作りには親子11組が参加。約3カ月かけて完成させ、にわか祭本番前の8月19日には、『ミニにわか祭』を行って町内を練り歩いた。「できるだけ本物に近い作りを教えることで、若い親たちににわかの作りを知ってもらおうようにしました。子どもたちには、祭りの言い伝えなどを教えなが



▲出来上がったカレンダー

ら一緒に町を練り歩きました」。

鵜川の歴史を暦にしたカレンダーは、公民館歴史教室のメンバーが文献を調べたり、寺への聞き取り調査などを行った。掲載する項目は、議論を重ねて120項目に絞り込んだ。「暦には、今は行っていない行事や祭礼のほか、久田船長や原勤堂など郷土の偉人の生没日、鵜川郵便局の開局日など、

館の活動が、郷土愛を育んでいく。

③ 小間生公民館

（事業名…久田和紙の伝統文化継承事業）

「久田和紙を守り、育てていくためには原料であるコウゾの確保が欠かせません」。小間生公民館長であり、久田和紙の製法を受け継ぐ『みわ会』の

鵜川にとって大切な歴史が掲載されています。知らなかった地域の歴史を知ること、ふるさとを再発見するきっかけにしてほしい」と地区約500世帯に配布された。地域住民には好評だという。「公民館の役割は、地域を元気にすることと文化の伝承。そのための発信場所であること。タウン誌の制作や昔遊びの復活など、やりたいことはまだまだあります」と意気込む。地域を見つめ直す鵜川公民

▶和紙原料のコウゾの植栽



会長でもある谷内静雄さんは、特色ある活動事業でコウゾの移植・植栽を提案。6月8日に久田地区の休耕地200アールにコウゾの苗50本の植栽と、山に自生していた若木50本の移植に取り組んだ。

作業には、平成25年度から里山里

▶世界に一つだけの卒業証書



海交流を実施し、卒業証書用の和紙づくりを体験する柳田中学校と小木中学校の3年生が協力。みわ会メンバーや地元造園業者らと一緒に汗を流した。

「移植・植栽したコウゾはおおむね順調に育っています。安定した原料確保のためにも300本を目標にした

い」と語る谷内さん。「荒廃地を活用することで、久田地区をコウゾの一大産地にしたい」と意気込んでいる。昭和63年に旧小間生小学校の体験学習として復活した久田和紙。小学校の閉校を控えた平成13年9月にみわ会が設立され、その技術を受け継いだ。「久田

和紙という眠っ

ていた地域の伝統文化が発掘され、復活し、受け継がれました。地域に根差した活動に光を当てるのは、公民館しかできません。みわ会を公民館活動の核に据えて育成していくことで、久田和紙の保存継承をしていきます」。

高齡化や後継者不足など、抱える課題は決して少なくない。

能登町教育委員会事務局長 小坂 智

「継承していくためには、地域の皆さんの理解と協力が欠かせません。そのためには公民館の規約を作るなど体制づくりも必要と考えています」。久田和紙という原石。地域を巻き込む公民館活動が原石を磨き、輝かせる。

今後の新しい動き

今まで公民館は、どうしても高齢の方々が活動する場としての認識がありました。しかし、平成25年度の特徴ある活動事業の中には、婚活事業が始まり、若い未婚の男女も公民館活動に関わる予定です。今後は、子供や高齢者だけではなく、20代〜40代といった中間層にも公民館活動に加わる工夫をしていきたいと考えています。

この公民館特色ある活動事業を進めていく中で、地域住民のつながりが増え、町の融和が図られると共に、地域の自主的な取り組みを推進していきたいと考えています。

能登町教育委員会事務局長

小坂 智

(平成25年7月1日付第2845号)

▼「市田柿」は、平成18年に地域ブランドとして登録された南信州を代表する特産品

現 地 レ ポ ー ト

高森町の「PRIDE」「FUN」 「LOVE」をデザインする 「タウンプロモーション」の取組



長野県 高森町



高森町の概要

長野県の南部、南アルプスと中央アルプスに囲まれた「伊那谷」の中にたえずお私たちの町、高森町。昭和32年に市田村と山吹村が合併し、平成24年7月には町制施行55周年を迎えました。面積45・26㎢の中に約13,500人の人が住み、天竜川をはじめとした豊かな自然と歴史文化に恵まれ、そして隣接する飯田市をはじめとした市町村を結ぶ幹線道路を中心に商業施設や工業団地も立ち並び「自然と都市が調和した」町です。

「市田柿」発祥の里

この恵まれた環境に囲まれた当町は、各種農産物の南限・北限の境界に位置し、一年中おいしい果物や野菜を収穫することができます。

その中でも当町の一番の特産品は「市田柿」です。平成18年に長野県で初めて地域団体商標登録（地域ブランド）を受けました。旧村名の「市田」を冠するこの干し柿の発祥の地は、ここ高森町なのです。

10月下旬から11月にかけて綺麗な色づいた市田柿の収穫が始まり、皮むき・柿つるしが始まります。以前は手作業であり本棟づくりの民家の軒先につるされた「柿すだれ」の風景はこの飯田下伊那地方の初冬の風物詩でしたが、今では食品衛生上の問題でその姿は減りつつあります。

加工技術は機械化されても先人たちの精神や知恵は受け継がれ、農家の

ご当地キャラクター



「柿丸くん」

皆さんの丁寧な仕事で、美しくおいしい市田柿が出来上がります。天竜川からの「朝霧」による適度な湿度、そして日中の温暖な気候の「乾湿の繰り返し」で、本来持つ糖分が白く表面に浮かび上がります。これが市田柿のおいしさの秘密です。

飯田下伊那地方（南信州）を取り巻く状況

わたしたちの高森町を取り巻く状況は大きく変化しています。高森町があるこの飯田下伊那地域は人口17万、面積は香川県に匹敵する地域です。

この地域は、少子高齢化や人口流出などの影響で1年間で約1、200人減少しており（平成22年度国勢調査結果より）課題の一つとなっています。平成17年には飯田下伊那14市町村で「南信州定住自立圏」協定を締結し、この課題解決に向けて一丸となって取り組んでいます。

この人口減少のような内部環境の変化に加え、2027年に開通予定の「リニア中央新幹線」、また愛知県、静岡県、そしてこの南信州地域を結ぶ「三遠南信道」の動きなど、外部環境の面でも大きく変化しています。

高森町のCー（コミュニティ・アイデンティティ）を創ろう！

高森町では平成19年度より「たかもり★みらい議会（町内の小中学生による模擬議会）」を開催しています。担当職員の間で「高森町に住んでるって素晴らしい！ってみんなが思えるものを、何か作り出せないか」と悩んでいたところ、平成22年度に開催されたこの「たかもり★みらい議会」で「高



▶「たかもり★みらい議会」の様子

森町を元気にするためには、キャラクターを作って、たくさんの人たちと交流したらどうですか？」と小学生議員から提案を頂きました。

全国の自治体キャラクターを見ると有名なデザイナーや漫画家に依頼する事例は多く見られますが、高森町のアイデンティティの確立や誇りや自信を生み出すには「住民の皆さんに作ってもらわなくては意味がない」と考え、あえて町内在住・通勤・通学、そして出身者の方に限定し、約1か月かけてキャラクターとキャッチフレーズを募集しました。また選考の際にも町民の皆さんを中心に委員になっていた

できました。

その後は、町内の主要施設にて投票所を設置し、今度は町外から買い物等に来てくれる他市町村の方々も含め投票を行いました。実はこの投票を行ったのにも狙いがあります。住民の皆さんから応募された作品のどれも、高森町の自慢できることや良いところ、また歴史や風土を背景にデザインされたものばかりだったからです。そのため投票というプロセスを設けるとが高森町をPRできる一つの場となると考えたわけです。

最終的には、総数3000を超えて投票をしていただき、その投票結果

◀「たかもり★みらい議会」の様子



を判断材料に高森町のキャラクターとキャッチフレーズが決定しました。

誕生した高森町のキャラクターは『柿丸くん』。高森町の特産品である市田柿をモチーフにして、山と川をイメージした衣装を着ている元気な男の子です。キャッチフレーズは『元気もりもり あったかもり』。いつまでも元気であつたかい心を持った高森町の人々をイメージしています。平成24年6月には着ぐるみも完成し、町内外を問わず高森町と市田柿のPRのため、奔走しています。

AKY48!?

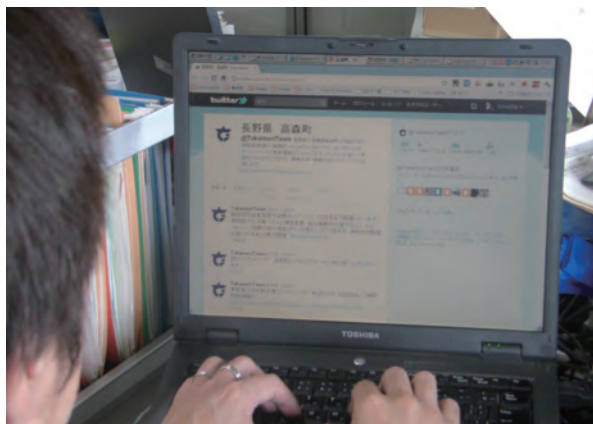
高森町に住みたい、という方々には「空き家情報バンク」制度を展開。通称「AKY48（空き家使用…あきやしよつ）プロジェクト」です。町内から情報提供があつた空き家と高森町に住みたいという人をつなげるプロジェクトです。ただし役場が行うのは主にWEBによる情報収集や情報提供のみ。実際の契約などの業務は町内の不動産業者の皆さんにお任せしています。行政と企業のそれぞれの長所を活かし、高森町に住みたい人を支援します。

まだまだ成果は出ていませんが、今後も企業の皆様と協働し、情報発信を行います。

SNSを活用した情報発信

また最近ではSNS（Social Network System）を活用した情報発信にも力を入れています。140文字までのミニブログ「Twitter」は飯田下伊那地方でも自治体の公式Twitterとしては一番初めに導入。WEBページの更新情報を中心に、町の最新情報をお知らせしています。桜の時期には開花状況を逐一報告。今年も

◀ SNSを活用した情報発信



多くの皆さんが高森町に来て下さいました。またYouTubeやUstreamなど、動画配信もスタート。先ほどの桜の状況をYouTubeにて公開したところ、おそろく出身者と思われる方から「本当に懐かしい」とのコメントをいただきました。その他にも、天竜川でカヌーに親しむ様子や景観情報などを公開しています。

平成24年4月からは町長をはじめ、各課の担当課長による予算説明の動画を公開し、町CATVのアーカイブ的な側面も持たせながら、町の動きをPRしています。

「こんないいところ（景観）あつたかもり」

もちろん町民のみなさんによるPRも活発です。リニア到来を見据えて、町内有志のみなさんによる「こんないいところ（景観）見つけ隊」という団体が発足しました。高森町の「守りたい、残したい景観」を考え、後世に伝えていきたい景観や建築物、そして作業風景までを写真におさめ、データベース化したものを広報やWEBに掲載しています。これを「こんないいところ（景観）あつたかもり」というプロジェクトとして、展開しています。

今後は、集めた景観情報をもとに、リニア到来時代の高森町の土地利用、そしてあるべき姿につなげていきたいと考えています。前述の町YouTubeでも「こんないいところ（景観）見つけ隊」のみなさんの景観情報を動画にてアップしています。

高森アルプスサーモン丼

「美味しい高森町を創ろう！」を合言葉に、高森町のご当地グルメを創ろうとする動きも出ています。町内の飲食店の皆さんによって「高森町ご当地

グルメ検討委員会」が発足。ニジマスを手付け合わせたアルプスサーモンの切り身の色が、高森町の特産品「市田柿」の色と似ていることから、このアルプスサーモンを使った「高森アルプスサーモン丼」を開発。

今では、町内の7店舗にて、色も鮮やかで味も最高な丼を堪能することができます。町の収穫祭のみならず、近隣のイベントやテレビにも積極的に参加し、高森町の新しいご当地グルメを広めてくれています。



▶ 高森町の新しいご当地グルメ「アルプスサーモン丼」

今では「アルプスサーモン・バーガー」「アルプスサーモン・ライスコロッケ」も発案!これからの動きが楽しみです。

TAKART (タカート) II TAKAMORI (高森) + START (新しい出発) + ART (創造)

若い世代によるタウンプロモーションも活発です。平成20年に発足した町内の30歳代・40歳代の異業種のメ



▲フリーペーパー「TAKART」

ンバーによる「TAKART」。

若さゆえの大胆な発想や行動力を活かしながら、町内の小学校の校をライトアップする「日本一の学校校INキャンドルナイト」、天竜川をタイヤチューブで流れる「Water Tube Adventure」、昔ながらの市田柿の皮むきや柿つるしを子どもたちに体験させる取組などの活動を行っています。

平成23年には高森町のまちづくりやリニア時代の未来戦略、高森町の中心を調査するなど、独自の切り口で高森町

をPRするフリーペーパーを発刊。今後も何かを起こしてくれるような予感がしています。

課題

このようなタウンプロモーションを展開していますが、多くの課題もあります。今までの高森町は、ある意味恵まれた環境にあつたと言えます。自然と都市がうまく調和しているため、人口に関しては南信州全体で減少の中にありながら微増となっていました。そのよ

うな理由もあつてか、自分の町の特産品や景観などを積極的にPRする土壌や風土が育つてこなかったと言えます。また行政側も、効果的な情報発信の手法や外部人材や民間企業とのコラボレーションを可能とする組織体制や意識・スキル等が整っていないという課題があります。

タウンプロモーションは決して行政だけではできない分野です。行政の強みと民間企業や外部人材の強みを組み合わせ、それぞれの責任と役割の中で相乗効果を生み出しながらタウンプロモーションを行うことが重要です。そのために町内の民間企業との連携や外部から専門家をお招きするなど、町内外の異業種・異文化の人たちとのつながりが解決方法になると考えています。専門家や大学が持つ「学術的視点」「外部的視点」「若者の視点」の3つから、高森町にある、または埋もれている地域資源を発掘し、一緒に磨いていければと考えています。

タウンプロモーションは、気を付けていないと目先の派手さや利益を求めるあまりに、町としての本心に大切なものを失ってしまう危険性があります。タウンプロモーションの基本は「自分たちの足元にある『光』を『観』る」こと。それらを通じて「高森町に住む

ことを誇りに持ち(PRIDE)」、「高森町のファンになり(FUN)」、「高森町を愛してくれる(LOVE)」人々を増やすことがタウンプロモーションだと考えています。だからこそ行政のみならず、民間企業、外部人材、近隣市町村や時には全く違う地域との自治体や団体ともつながり、多様な価値観や視点を「自分の町の写し鏡」として活かし、行政はその触媒としての機能やスキル等を習得しながら常に動いていくことが重要です。

高森町の宝を見つけ磨き、「PRIDE」、「FUN」、「LOVE」をデザインする、そんな意識を持つて、今後も高森町のタウンプロモーションを進めていこうと思っています。

高森町経営企画室 清水 衆
(平成24年7月2日付第2805号)

高森町公式WEB
<http://www.town.takamori.nagano.jp/>

高森町公式Twitter
<http://twitter.com/takamoritown/>

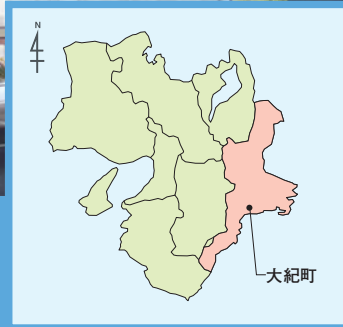
高森町公式YouTube
<http://www.youtube.com/user/tkcanoe>

▶防災のシンボル塔「錦タワー」

安心・安全なまちづくりを目指して 「津波災害から生命を守る「錦タワー」」



三重県 大紀町

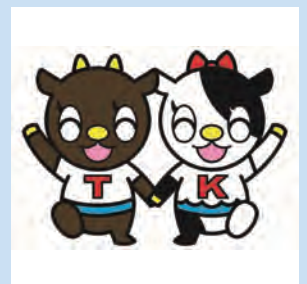


大紀町の概要

大紀町は三重県の中南部に位置し、東西約24・8 km、南北約26・3 kmで総面積233・54 km²のうち約91%を山林が占め、地形は全般に急峻で町内を流れる1級河川の宮川や大内山川、藤川沿いに民家と耕地が散在する農山村部と海に面した僅かな土地に民家が集中する沿岸部からなる典型的な農山村です。その海と山が織りなす自然は豊かで美しく、町内のほぼ全域が奥伊勢宮川峡県立公園にも指定されており、風光明媚な町として知られています。

当町は、地勢、産業、生活文化、購買動向などの日常や広域行政の取組みなど共通点を有する大宮町・紀勢町・大内山村の2町1村が平成17年2月14日に合併して誕生し、人口が約1万人で、漁業、畜産業、林業、農業の第一次産業が盛んな海と山の幸に恵まれた町です。

ご当地キャラクター



「たいちゃん」と「きーちゃん」

町内には、伊勢神宮別宮の「瀧原宮」が鎮座し、全国でも有名な松阪肉七保牛の生産地であり、酪農も盛んで大自
然の中で育てられた乳牛により作られ
た乳製品は有名です。

また、沿岸部は熊野灘に面したリ
アス式海岸で豊かな漁場に恵まれ、ブ
リ大敷（定置網）漁は県内有数の水揚
げ量を誇っています。

まちづくりでは、「人の命は何より
も大事」「子どもは町の宝、お年より
は町の誇り」を町是として掲げ、住民
と行政が一体となって、人の命を尊び、
子どもを育み、高齢者を敬う、助け合
いの心に満ちたまちづくりを目指して
います。

安心・安全な 災害に強いまちづくり

平成23年3月11日に発生した東日
本大震災では、日本周辺における観測
史上最大の地震が発生し、想定をはる
かに超えた巨大大津波が、東北地方と関
東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害
をもたらし、多くの尊い人命が奪われ
たことは記憶に新しいところです。

当町においても、唯一沿岸部に位
置する錦地区におきまして、昭和19年

12月7日に発生した東南海地震の大津
波により、64名の尊い人命と多くの財
産を失ったという大変つらい経験をしま
した。

また、平成24年度に国の中央防災
会議から発表された南海トラフを震源
とする巨大地震による新たな津波浸水
想定では、平均津波高13m、最大津波
高16mという、これまでの想定津波高
8mを大幅に超える愕然とするもので
した。

このことから「いつ起こってもお
かしくない」とされる大地震に備え、
その惨禍を教訓として、住民一人ひと
りの防災意識を高め、平和な住民生活
を確保することを目的に、毎年12月7



▶「大紀町防災の日」避難訓練

日を「大紀町防災の日」と定め、町内
全域を対象とした避難訓練を実施し、
安心・安全な災害に強いまちづくりを
進めてきました。

取組みの内容

安心・安全なまちづくりの基本は
『命』です。

当町の防災対策への取組みは、こ
の『命』の大切さを基本に考え、「人
の命は何よりも大事・一人の犠牲者も
出さない」ことを目標として、町村合
併以前の旧紀勢町で昭和61年当時から

防災対策を進め全国に先駆けて「防災
対策実行委員会」を組織し、国、県か
らご指導ご支援をいただきながら、町
内各地へ住民の皆さんが安全で迅速に

避難することができるよう、緊急津波
避難所の整備をはじめ、防災教育等の
啓発活動や各種訓練を実施するなど防
災対策を推進してきました。

また、現在の大紀町においても「大
紀町防災民会議」を組織し、防災対
策事業の計画作成及び各種事業を継続
して実施しています。この組織は町長
を本部長として、町内全地区の区長会
婦人会、各小中学校、漁協関係者、消
防団員、建設業者などの各種団体の代

表者の方など、多方面から幅広い方々
で構成され、緊急性を要する災害時に
おいても即時に対応できる、実効性の
ある組織編成となっています。

当町で唯一沿岸部に位置し、津波
被害が予想される錦地区には、現在、
約2,200人の方々が生活をしてい
ます。

この錦地区では、津波からの緊急
避難対策として、「地震発生後5分以
内で安全に避難できる高台（海拔約20
m地点）の確保」を目指し、現在31ヶ
所の津波避難所を整備しています。

平成10年度に完成した緊急津波避
難塔『錦タワー』は、津波発生時の緊
急避難所としてだけでなく「災害は忘
れたころにやってくる」のことわざど
おり、自然の凄さ、災害の怖さを風化
させることがないよう防災のシンボル
塔として、また、防災活動の拠点とし
て建設しました。

この『錦タワー』の構造は、鉄筋
コンクリート造5階建てで、基礎部分は
地盤改良によつて約6mの深さにあり
大変強固なもので、耐震設計もしっか
りとされています。また、形状は大津
波により流出する船舶等の衝突時の衝
撃を緩和できるよう工夫され円柱状に
なっています。各階の用途は、1階が

公衆トイレと消防用倉庫、2階が地区住民の皆さんの憩いの場として活用できる畳敷きの集会室になっています。3階が防災資料館、4階、5階が避難所となっております。最上階の5階で海拔20m20cmの高さとなっています。

また、停電時には最上階に備付けの発電機により非常用電源を確保することができ、救急箱、救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。タワーへの避難用入口は、らせん状の外階段で最上階まで昇ることができ、タワーが面している全ての道路、どこからでも避難できる

よつ3ヶ所に階段入口が設置してあります。

この『錦タワー』は平成11年度に消防庁主催の第3回防災まちづくり大賞（消防科学総合センター理事長賞）を受賞し、現在では防災対策の先進地事例として、国内外並びに全国各地から官民問わず多数の方々が視察に訪れ、又、国の防災資料としても活用されています。

そして、平成24年度には第2の緊急津波避難塔として『第2錦タワー』を建設しました。

この『第2錦タワー』の建設場所は、魚市場の近くに位置し、津波が最も早く到達する地区であり、山裾の高台にある津波避難所へは遠く、大地震により民家等が倒壊し避難路が寸断された場合に、市場で働く方や住民の皆さんが迅速に避難できるように建設しました。構造は鉄筋コンクリート造一部鉄骨造8階建てで、1階が3ヶ所の入口と消防用倉庫、2階が台風、大雨警報発令時などの避難室、6階、7階が津波時の避難室、最上階の8階で海拔23m80cmの高さとなっています。設備も『錦タワー』と同様に、停電時には最上階に備付けの発電機により非常用電源を確保することができるほか、救急箱、



▶第2錦タワー

◀釜土避難所と第2釜土避難所



救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。最上階までは内階段で昇ることができ、錦地区が一望できる展望所となっています。

また、『第2錦タワー』の竣工に際しまして、鈴木英敬三重県知事より「命あればこそ 幸せも笑顔もおとずれ」の言葉を頂戴いたしましたので、記念碑として敷地内に建立しています。この2つのタワーは、平時時には階段を利用した健康維持など住民の皆さんの絆の場として、多目的に活用されています。

平成25年度に完成しました、津波避難所の第2釜土避難所、花園・新生町避難所をご紹介します。

◀花園・新生町避難所



第2釜土避難所は、既設の釜土避難所の高さが海拔11m27cmでありましたが、南海トラフ巨大地震の想定津波高に対応するために、海拔18m50cmの箇所に整備したもので、三重県が施工する急傾斜地崩壊対策事業と同時施工し、施設管理用通路を避難路として供用することで避難に要する時間が飛躍的に短縮され、また、整備費用の軽減も図りました。

また、花園・新生町避難所も三重県が施工する治山事業との同時施工により整備しています。

これらの津波避難所へ向かう避難路の整備については、民家が密集した錦地区の中心部であるため、地震によ

る民家の倒壊や屋根瓦の落下、ブロック塀の倒壊などにより避難路が寸断されることが考えられ、短時間で大勢の方が安全に避難していただけるよう、複数の避難路を整備する必要があります。

おかげ様で、避難所付近にお住まいの住民の皆様のご好意によりまして、ご自宅の軒下を避難通路として無償で活用させていただき大変感謝しているところです。

それぞれの津波避難所へは、2つのタワーと同様に、停電時には備付けの発電機により非常用電源や避難路の照明を確保することができるほか、救急箱、救命胴衣、救助用ロープ、毛布などの防災用備品を備えています。

また、平成23年9月に発生した紀伊半島大水害で、当町を流れる大内山川が氾濫し多くの民家が床上・床下浸水の被害を受け、田畑や河川の堤防・護岸も甚大な被害を受けました。

河川災害復旧については、氾濫箇所の河川改良も含めて対策を施し、堆積土砂の影響も大きかったことから河川内の土砂の撤去などを実施しています。

その他ソフト面の取組みとして、毎年12月7日の「大紀町防災の日」

避難訓練では、昭和19年の東南海地震が発生した午後1時40分に、町内全域一斉のサイレンを合図に避難訓練を行っています。訓練では避難袋を背負った住民の皆さんが、最寄りの避難所へ避難していただき、避難所備付けの救急箱や懐中電灯、毛布など防災用備品の点検や非常用発電機の使い方、訓練しています。

避難訓練終了後には、町内各地の自主防災組織の皆さんが消火器を使用した初期消火訓練や防災専門の講師を招いて防災講演会も開催しています。

また、夜間に地震が発生し、大津波が来襲したことを想定した夜間津波避難訓練も実施しています。懐中電灯



▶民家の軒下を利用した避難通路

◀錦小学校登下校時避難訓練



を片手に昼間とは違い避難しづらい状況を体験していただくことを目的としています。

その他では、町内全6校の小中学校が毎月7日を学校防災の日と定め、学校での避難訓練をはじめ、児童生徒が登下校時に発生した、地震・津波からの避難のため、現在の位置から最寄りの避難所へ自主的に避難する訓練を行うなど、学校・保護者が一体となって防災教育に取り組んでいます。

又、錦地区の役場錦支所は海拔31mの高台に耐震性にも充分配慮して整備されており、停電時においても3日間程度の電力を賄える程の発電機と燃料を備えております。更に、支所に隣

接した海拔27mの位置には多目的ホールがあり、500名程度の避難者の収容並びに備蓄米を備え、更に隣接した海拔22mのところに保育園が整備されており、有事の際には併せて活用が可能となります。

今後の課題

これまで防災対策として避難所整備をはじめ、避難訓練の実施や防災教育等の啓発活動、住宅耐震化の推進など各種事業を進めてきましたが、防災施設の整備は平成25年度でほぼ計画が完了いたしました。

これからは東日本大震災の大津波を教訓に、粘り強い構造の防波堤などにより、少しでも町内に入る津波の威力を弱め、津波が到達する時間を遅らせることで、避難する時間を稼ぐことを目的とした減災対策の推進を図ります。

今後も地元住民の皆様のご理解とご協力を賜り、国、県の関係当局のご指導を仰ぎながら防災対策・減災対策に取り組んでいきたいと考えています。

大紀町長 谷口 友見

(平成26年1月6日付第2864号)



ふ く さ き ち ょ う
兵庫県 福崎町



柳田國男に学ぶ 福崎町

「自律(立)のまちづくり」交付金事業

福崎町の概要

福崎町は、兵庫県の中央部、姫路市の北約20 kmに位置し、人口は約2万人、面積は約46 km²です。中国自動車道と播但連絡道路のICがあり、古くから交通の要衝として知られた町です。文化勲章受章者の柳田國男、吉識雅夫の2名を擁しているのが町の誇りです。

柳田國男は民俗学の父として広く知られています。吉識雅夫は造船工学の権威であり、この人の開発した技術によって大型タンカーの造船が可能になったと言われています。

福崎町の特産品は、大麦の一種であるもち麦を素材とする数々のもちむぎ商品です。もち麦は穀類の中でも高タンパク、高ミネラルで、βグルカンという食物繊維の含有率が高いため、注目されています。もちむぎ麵、もちむぎ素麵「福の糸」、もちむぎカステラ、お茶、焼酎などがあります。

自律の心を育て、参画と協働のまちづくり

柳田國男は「美しき村」の中で「村は住む人のほんの僅かな気持ちから、美しくもまづくもなるものだといふことを、考へるような機会が私には多かった。」と書いています。

この言葉はまちづくりの原点だと思っています。強制されることなく、ほんの僅かな気持ちでいいからよい町をつくらうと行動する人が増える町がよい町になっていくのです。この言葉を大切に「自律(立)の心を育て、参画と協働のまちづくり」をメインスローガンに掲げました。そして、それを支える次の4本の柱をたてました。

ご当地キャラクター



「フクちゃん」と「サキちゃん」

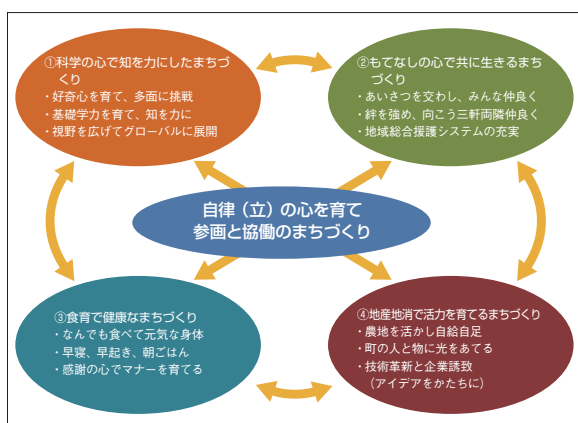
1. 科学の心で知を力にしたまちづくり

計画を立て実行するには多くの知識と情報が必要です。その知識と情報は、偏見や偏りがあつては困るので、より多方面であることが大切です。

私は人生の中で二つの神話に裏切られた苦い経験を持っています。

一つは小学校時代の神風神話です。日本は神国なので神風が吹き戦争に負けることはないと教えられ、信じた私はすっかり軍国少年となっていました。

二つ目の神話は原子力の安全神話です。原子力は安全で安価で安心なエネルギーだと言われ、兵器に使用するのはよくないが、発電には心配がない



▶自律(立)のまちづくり イメージ図

のではないかと思ってきました。しかし、3・11の大地震による福島原発事故によって、この思いは吹き飛びました。「科学の心で」としたのは、この苦い思いを反映させたものです。

2. もてなしの心で共に生きるまちづくり

もてなしという行為は、相手があつて初めて成り立つ行為です。福島町では二つの意味を持っています。

小さな町ですが、近年、孤独死が何件か発生しました。絆が弱くなりかけているのです。隣近所が声を掛け合い、仲良く助け合い、地域コミュニティを豊かにすることが求められています。



▶地区にある寺社や施設をみんなで歩いて地域の魅力再発見！

◀物知りの高齢者に伝統文化を学ぼう！



次に、観光客の少なさです。最近の県の統計によると、年間23万人で、県下市町の中で少ない方から3番目という惨たんたる状態です。交通の要衝として多くの人が交流するわけですから、神社仏閣、山や池も紹介して、もてなしの心で滞在時間を長くしてもらえ工夫が必要なのです。

3. 食育で健康なまちづくり

食育に力を入れるようになった動機は、町内の小学生の肥満率で、県下で一番高い数字が出たからです。肥満は健康によくないと言われています。肥満対策を学校だけに任せず、町ぐるみで取り組むことにしました。

毎日の食事をただ漫然と繰り返すのではなく、栄養やマナーにも気を遣うように努めています。

4. 地産地消で活力を育てるまちづくり

福島町の地産地消は、農林産物に限らず、人、物すべてに光を当てることです。優れた知識技能の持ち主を探して「まちの先生」として働いてもらうこと、町外に出て活躍されている人の力を借りること、町の風物を再評価して活用していくことを重視しています。

自律(立)のまちづくり 交付金制度

まちづくりの計画は作りましたが、問題はどう実行するかです。着目したのは、伝統的な集落組織です。集落には公民館や集会所があり、集落(自治会)を運営する執行機関の長を区長と呼んでいます。この集落の活動をとおして「自律(立)の心を育て、参画と協働のまちづくり」を実践してもらうと考え、「自律(立)のまちづくり交付金」制度を創設しました。

1. 交付金要綱

要綱のいくつかを例示します。

第1条 この要綱は、「自律(立)の心を育て、参画と協働ですすめるまちづくり」の理念のもと、自治会の創意と工夫、判断と責任に

よって、地域の特性に応じた魅力あるまちづくりを推進するために自律（立）のまちづくり交付金を交付して、自治意識と連帯感を醸成し、安全、安心で暮らしやすい自治会を形成していくことを目的とする。

第3条 交付金の対象となる事業は、基本事業及び自由事業とする。

2 基本事業は、自治会の各種団体の代表により構成された委員会を開催し、地域の現状と課題及びその取組について話し合い、その計画書及び報告書の作成に取り組みものとする。

3 自由事業は、前項において計画された自治会内のつながりを活性化し、第1条の目的を推進できる取組であること。

第4条 町長は、原則として、毎年



▶地域を花と笑顔でいっぱいしよう！
播但線沿いの地域の活動

度定める予算の範囲内で、算出して得た額を上限に、自治会に対し交付金を交付することができる。ただし、次の各号のいずれかに該当する活動には交付しない。

(1) 宗教の教義を広め、儀式を行い又は信者を強化育成する活動
(2) 政治上の主義を推進若しくは支持し、又はこれに反対する活動

(3) 特定の公職の候補者若しくは公職にある者又は政党を推薦若しくは支持し、又はこれらに反対する活動

2. 民主主義の学校

私はこの交付金制度を民主主義の学校と位置付けています。みんな若しくは各組織の代表が集まって、よく話し合い、計画を作り、予算を組み、みんなで行う。この繰り返しを持続的に遂行できることが大切です。

「自治会の中のあらゆる団体が、それぞれの意見を持ち寄り、話し合いの中で決められた内容であれば認める方向です。重要なのは、その結論へたどり着くまでの過程です。誰がどういった発言をして、どのような議論がなされ、その結論が出たのか、それがきちんと分かるように、参加者名簿と議事録をとっておいてください。」と伝えました。

3. 予算と町職員の役割

平成25年度の予算は、基本事業100万円、自由事業1千万円です。各自治会への配分は、区長会に諮った結果、均等割40%、人口割60%となりました。最高額は617千円、最低額は166千円です。参加自治会は33自治会のうち31で、参加率は94%でした。平成25年度が初めてのスタートなので、事業推進の補助員として2～3人の町職員を各自治会に配置し、話し合い、記録、趣旨説明の手助けをしました。また、職員が集落に入り、町民と直接ふれ合い、町民の声を聴くことによつて公務員としての自覚を高め、能力アップに役立つのではないかと期待しています。

4. 事業の展開

実際に取り組みを進める段階で、私の説明不足から、職員の理解にばらつきが見られ、何回か意思統一の場をもちました。なかでも「みんなが集まって」の理解に差が出ました。自治会の役員だけで検討をしたり、記録が不十分であったりすることがありました。

11月に入り、平成25年度の計画の90%は終わり、各自治会での反省会が開かれています。その記録は集約されていませんが、反省と共に、平成26年



▲コスモスいっぱいの会場で、手作り料理、バザー、写生会など、イベント盛りだくさん！

度の取り組みを進めている自治会もあると聞いています。

近く町としても、反省会を兼ねた実践発表会を計画しています。実践報告をまとめ、多くの聴衆の前で発表すること、よい勉強になるのではないかと考えています。

すべての記録は膨大ですが、町図書館には備えようと思っています。各自治会で出た声はまちづくりにとって大切な資料ですし、各自治会が互いに学び合い、次の計画づくりの参考にしたいと思っています。

私は、自治会の話題が4本柱全般にわたって取り上げられ、話し合いが展開され、実行に移されればよいなと思っています。

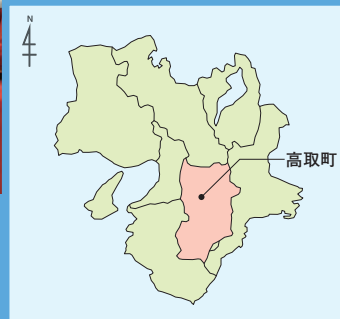
福岡町長 嶋田 正義

(平成25年12月16日付第2863号)

シニア世代が光り輝く町



た か と り ち ょ う
奈良県 高取町



はじめに

高取町は、奈良盆地の南部に位置し、吉野地方への入り口となっており、自然あふれる緑豊かな環境に恵まれる一方、古代～中世～近世の歴史を物語る遺跡も数多く残り、それらが地域の住民によって大切に受け継がれている地域でもあります。

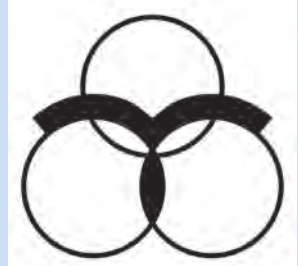
日本一の山城「高取城跡」

南北朝時代、豪族の越智氏がかきあげ城として築き、郡山城に入府した豊臣秀長の命により、1585年本多氏による大修築が始まりました。本多氏以後、譜代大名の植村氏の居城となり、幕末まで続きました。

標高583.9mの高取山山頂に築かれた高取城は、平地から高低差390mの難攻不落という視点から日

本一の山城といわれています。城内は周囲3km、郭内は周囲30kmの規模を誇り、「高取山全体が山城」と言っても過言ではない規模となっています。今は、石垣を残すのみとなっていますが、その壮大さにかつての栄華が偲ばれます。

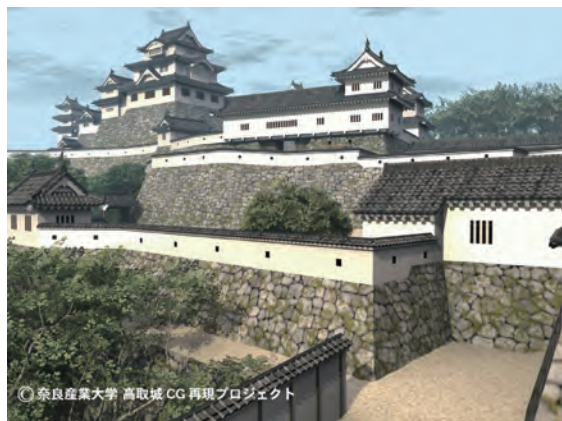
高取町町章



▶高取城跡



◀CGにより再現された高取城



©奈良産業大学 高取城CG再現プロジェクト

◀全国から参拝者が訪れる壺阪寺



西国三十三所巡礼六番札所 「壺阪寺」

高取町内には、全国から参拝者が訪れる壺阪寺があります。壺阪寺は、眼病に靈験あらたかという観音信仰で知られ、三重塔と礼堂は国の重要文化財に指定されています。

壺阪観音の信仰によって盲目の沙弥が開眼治癒したという話が「日本感靈録」にあり、『壺坂靈験記』のもととなったといわれています。

『壺坂靈験記』は今から300年あ

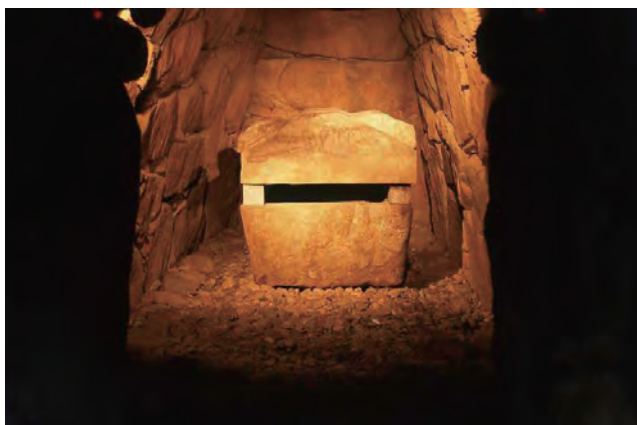
まり前、壺阪寺のふもとに住んでいた沢市という盲目の夫と妻お里の夫婦愛をテーマにした物語。

沢市に献身的な愛を捧げたお里の願いが神仏に届き、観音様のご利益で沢市は目が見えるようになったというお話です。浄瑠璃をはじめ、歌舞伎や浪曲にも取りあげられ、明治期には全国で大変な評判となり、ついには海外にまで知られるにいたった名作です。壺阪寺には、さわると夫婦の仲が円満になるという「沢市の杖」や「お里・沢市の像」があります。

全国有数の古墳密集地

古代、明日香村と高取町の地域は、今来郡（イマキコホリ）と呼ばれ、今来人（古代の渡来人）の代表格であった東漢氏（ヤマトノアヤウジ）が大陸からもたらした新しい文化が栄えた地であったと言われています。その証拠に、高取町内には、大小あわせて約800基の古墳が点在し、日本でも有数の古墳が密集する地域です。

町内の古墳は、6世紀の初めから



▶国史跡に指定されている「市尾宮塚古墳」

7世紀の終わりにかけて築造されたものが多く、7世紀後半につくられた「東明神古墳」は草壁皇子（天武・持統天皇の皇子）の墓の可能性があるといわれています。

その他にも、国史跡に指定されている「市尾墓山古墳」と「市尾宮塚古墳」の二つの前方後円墳があり、当時の有力な豪族が葬られているものと考えられています。

「町家の雛めぐり」で観光客と住民の交流を

高取町の人口は、約7,500人と年々減少の一途をたどり、高齢化率は30%を超えています。かつて、300軒を超える商店があつた土佐街道には、数えるほどの商店があるだけとなってしまいました。

さらに、私が町長に就任した平成20年度当時は、町の財政状況が「赤字再建団体」に転落する一歩手前の状態であり、このままでは高取町が衰退してしまつた危機的状況でした。

しかしそのような中、かつての賑わいを取り戻すべく、城下町に雛人形を展示し、住民との交流・体験を楽しんでもらうイベントをシニア住民が主

◀歴史的な面影が残る土佐街道



体となり始めることとなりました。

高取藩2万5千石の城下町として栄え、高取城跡に向かってまつすく伸びる土佐街道。石畳とカラー舗装により整備した土佐街道は、その両側に水路が流れ、今なお江戸時代の面影が残る町家が並んでいます。

この町家の玄関先に雛人形を展示してもらった「町家の雛めぐり」は、年々□□ミで観光客が増え、6回目を迎えた平成24年は、4万6千人を超える方に訪れていただきました。

また、10月から11月にかけて「案

◀「たかとり城まつり」火縄銃実演



山子めぐり」を、11月23日には「たかとり城まつり」を開催しました。いずれも我が町の歴史や文化を体感できるイベントとなっています。

住民と観光客のお話がヒット

「町家の雛めぐり」では、訪れていただく約8割がシニア女性です。「町家の雛めぐり」がシニア女性の人気を得た理由。これは同世代の住民が積極的に関わり、観光客と地域住民が雛人形をきっかけに互いに話しをすること

が出来ることだと感じています。

観光地でボランティアガイドの話を聞くと、より違った目線で見られる効果と同じで、地元住民と話をする事でこの地域の良さや特徴をより感じてもらえるのです。

また、シニア女性の中には、戦時中や戦後で「雛まつり」をする世情でなく、もう一度自分のための「雛まつり」として訪れる方もおり、同世代の住民と気持ちを共にすることができたことも一つの要因です。

他の有名な観光地では味わえない高取ならではの魅力を強みに、今後も「おもてなし」の心を大切に、イベントを盛り上げていきたいと考えます。

行政と住民の協力

高取町の高齢化率は30%を越えています。シニア世代にはこれまで培ってきた「経験・知恵・技術」が豊富にあり、またパワーもみなぎっています。この地元住民のかける思いに対して、行政はハード整備などでバックアップをしてきました。

かつての行政主導ではなく、住民主導により運営するイベントを行政が支え、これにより地域がより活性化し、

継続したイベントとして成長することが期待できます。

今後の課題

3月1日～31日の1ヶ月間開催する「町家の雛めぐり」。その中心として活動している方々の平均年齢は70歳を超え、後継者の育成が課題となってきました。

また、リピーターの観光客が多いことから、毎年工夫を凝らすことにより飽きさせないイベントづくりが必要だと考えています。

行政としては、最寄り駅である壱阪山駅の整備や、お手洗いや休憩場所等の増設が今後の課題となっています。

高齢化が進む日本において、高齢者がいきいきと暮らす町の代表として、今後も光り輝きつづけたいと思います。そのため、今後も地域の特性と魅力を大切にしながら、さらに元気で夢のある町づくりに向け、高齢者が光り輝く町づくり、観光の振興などに一層積極的に取り組んでいきたいと考えています。

高取町長 植村 家忠

(平成24年9月10日付第28013号)

アートを生かした住民による 住民のための町づくり



つ な ぎ ま ち
熊本県 津奈木町



津奈木町の概要

津奈木町は熊本県南部に位置し、海と山の豊かな自然に囲まれています。温暖な気候のためさまざまな品種の柑橘類が栽培され、新鮮な魚介類も特産品となっています。総面積33・98km²の土地には展望所として整備された城跡の舞鶴城公園があるほか、江戸時代後期に架けられた大小さまざまな石橋が点在しており、才知に長けたいにしたい人々の生活を偲ぶことができます。

緑と彫刻のある町づくり

水俣病の被害地域でもあった津奈木町は、文化による地域再生を目指して昭和59年に「美術品取得基金」を創設し、佐藤忠良氏や岩野勇三氏など優れた彫刻家の作品を公共施設など町の

屋内外の要所に設置する「緑と彫刻のある町づくり」に取り組んできました。その数は現在では15体を数え、平成26年も新たな作品の設置を進めています。また、彫刻の設置と平行して公共施設に絵画を展示するなど、町民が美術と接する機会を設けることに努めてきました。これらの活動の集大成として平成13年に開館したのがつなぎ美術館です。



◀ 野外彫刻のひとつ 岩野勇三作「風ん子」

津奈木町町章



住民参画型 アートプロジェクト

著名な作家の作品展を開催するつなぎ美術館には、町外から多くの美術ファンが訪れました。交流人口の増加という点では町外からの来館は歓迎すべきことですが、町立であるからには町民の利用をさらに増やす必要があります。しかし、「緑と彫刻のある町づくり」の実績があるとはいえ、やはり都市部に比べれば美術に接する機会が少ないのが実情です。さらに、大人はすでに趣味嗜好が完成されており、新たに美術の魅力を理解してもらうことは容易ではありません。そこで、町民の日常と美術の距離を縮めて関心をもってもらうための方策を考えることになりました。

その結果、美術を作品としてだけでなく地域資源の再評価や地域の課題の解決を図る手段として機能させるプロジェクトが立案されたのです。これは、現代美術作家に津奈木町に通ってもらい、あらかじめ設けられたテーマに沿って町民と共に課題を探し、その解決のために地域資源を活用した表

現活動を考え実践していくというもので「住民参画型現代美術プロジェクト」(平成24年に住民参画型アートプロジェクトと改称)と名付けられました。また、津奈木町を拠点に活動する諸団体のメンバーによる実行委員会を編成し、あくまでも町民向けの社会教育事業の一環として進めていくことになりました。そのため、招聘する現代美術作家には作品の質だけではなく実行委員や一般参加者に気づきを促すファシリテーターとしての能力も求められます。

最初の年は、誰もが参加しやすいように虹をテーマに地域で人々と共同でパフォーマンスなどの表現活動を行うレインボー岡山氏を招聘しました。最初の月にワークショップの内容を決め翌月はその準備をし、さらにその翌月に一般参加者を迎えてワークショップを実施します。これを季節毎に4回行いました。

春は町のランドマークでもある奇岩、重盤岩を舞台にした「重盤岩がキャンパスだ!」。山中を駆け巡りながら自然と人間の手による創造物の差異を体感しました。夏の「眼鏡橋 レインボー大作戦」では1000個の7色の

風船を県重要文化財でもある石橋から滝のように落としたあと、川面に浮かべて虹の橋をつくりました。秋は野外彫刻の中でも大きすぎて視線が上にかすほとんど視界に入らない野外彫刻を虹色に飾り付けて目立たせようとす

◀「津奈木ハートマン計画」



◀「TSUNAGI 光と風の回廊」



る「羽ばたけ 夢のつばさ!」を実施しました。高所作業車の提供があるなど活動の輪は民間企業も巻き込みました。

いよいよ1年間の活動のフィナーレともなる冬。これまでの活動の楽し

さをすべての町民に伝えたいと思った実行委員は5000人の全町民が同時に手をつなぐパフォーマンスの実施を検討しましたが、やはり実現は困難でした。そこで考えだされたのが、可能な限り多くの町民の手形を集めてつなぎあわせ美術館内の壁一面に貼るという「津奈木をつなげ!虹の橋」でした。レインボー岡山氏と実行委員は町内の幼稚園やさまざまな催し物にかけ虹をイメージした7色の画用紙1300枚に1300人分の手形を集め、町内

◀「大地のメモリア」



◀「TSUNAGIハート！アート！パラダイス！」



▶「AKASAKI海想日誌」



外で話題となりました。

2年目は山の木々をテーマにした「TSUNAGI光と風の回廊」。この年から平成24年まではファシリテーターを務めるアーティストの個展を秋に開催しました。ワークショップと秋の展覧会を連動させることで実行委員や一般参加者が美術作品そのものへの興味をもちやすくなります。3年目は地域の陶土を使って町の未来像をつくり出す「大地のメモリア」。4年目は

閉校となった海の上の小学校を活用した「AKASAKI海想日誌」。5年目は熊本県立劇場との共同事業で、町のオヤジたちが結成したオヤジダンサーズの公演の舞台美術を町民がつくりあげる「TSUNAGIハート！アート！パラダイス！」。6年目となる平成26年は耐震問題により立ち入りができなくなった海の上の旧小学校に全国の人々の水曜日の物語を集めて転送により交換する「赤崎水曜日郵便局」を実施しました。

ゆきふじ

実行委員の任期は1年ですが継続して務める委員も多く、その周囲の町民がさらにサポーターとして活動を支えるなど、プロジェクトは少しずつ町民の間に浸透してきています。このような地域に根ざした住民主体の活動が評価され、つなぎ美術館は平成25年度地域創造大賞（総務大臣賞）を受賞しました。

多くの人間が少なからず表現という行為に関心を抱いているという実感は住民参画型アートプロジェクトを通じて得られており、このことは美術が

◀「赤崎水曜日郵便局」



都市部の専有物ではないことを示しています。美術は通時性と共時性を兼ね備え、多くの人、物、場所をつなぐ能力を秘めています。

今後つなぎ美術館は、展覧会や住民参画型アートプロジェクトを通じて日常における美術の可能性を追究しながら地域の活性化に努めてまいります。

津奈木町長 西川 裕

（平成26年1月13日付第2865号）

花と緑と水のまち



み また ちょう
宮崎県 三股町



三股町の概要

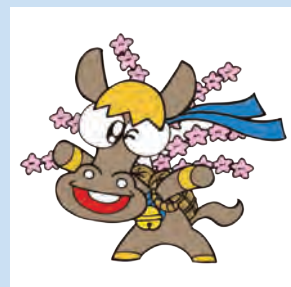
三股町は、宮崎県の南西部に広がる都城盆地の東部に位置し、町の約72%が鰐塚山系に囲まれた平均標高250mの台地です。そして、九州山地の高峰、高千穂の峰をはるか西に望み、東は鰐塚山、雪が峯、柳岳、東岳の4つの峰が連なる鰐塚山系に囲まれ、これらの山地を背景に平野が広がる中、東西に大淀川の支流「沖水川」が貫流している自然豊かな土地柄です。町の人口は、25,286人（平成25年7月1日現在）となっており、県内で唯一人口が増加している町です。また、15歳以下の年少人口の割合が16・2%と県内でもその割合は一番高くなっております。

歴史的には、明治2年、薩摩藩士

で弱冠35歳の三島通庸公が都城の地頭として赴任し、三股建設の大事業を起し、教育振興をもって開拓の大本としました。その頃、荒涼とした原野であつた山王原地区をこの地の麓と定め、縦横に大道路を建設し、そして近隣集落から70戸を移住させ、政庁と学校を建設しました。わずか2年の在任期間ではありましたが、短日月に開拓整備したものは多く、三股発展の礎は三島通庸公にあるといっても過言ではないと言われております。そして、明治22年の村制施行により三股村、昭和23年に三股町となり、平成25年で町制施行65周年を迎えました。

本町の基幹産業は、農畜産業であり、温和な気候と肥沃な土壌が生み出す農畜産物の品質は高く評価されております。肉用牛、ひな、サトイモ、ラッキョウ、荒茶は全国1、800市町村

ご当地キャラクター



「くいまーるじゃんかんくん」

▶平成24年の全国和牛能力共進会で見事日本一に輝いた福永透さんの受賞報告。



の中でも100位以内に入る産出額を誇っています。特に肉用牛においては、平成24年10月に開催された「和牛のオリンピック」と呼ばれる第10回全国和牛能力共進会において、本町の肥育牛が宮崎県代表として出品され、二大会連続で日本一を獲得するなど、高い実績を残しています。

文教のまち

三股町には、小学校6校、中学校1校があり、昔から「文教のまち」と

呼ばれています。藩政時代、薩摩藩に属していたこの地域では、郷中教育と呼ばれる伝統的な教育が盛んに行われていました。「郷中」とは今でいう自治会組織のようなものです。その中で、年少者は年長者から武芸、学問のほか、社会生活を送るために大切なことを学んできました。明治初期になり、三島通庸は郷中教育をさらに振興し、「礼儀を正しくせよ」などの教育が徹底されていました。この精神を受け継いで三股町には独自の「あいさつ」があります。登校時には感謝の心をもって校門で一礼、授業前には心を落ち着けて黙想・座礼をします。また、無言清掃で学校を磨くとともに、心を磨くことを学びます。また、毎月3の付く日を「みまたの日」と定めて、「みまたの日」には三股の文化・歴史などを給食時間に放送して郷土を愛するところを育てています。このように「あいさつ」「無言清掃」「郷土学習」など、「三股ならではの」の理念をもとに義務教育課程の9年間を通して、継続した一貫教育を行っています。特に、郷土学習については、未来を担う子どもたち

ふるさとを想い、大切に心を育てるため、伝統芸能を各学校で練習しています。地域の人々が学校を通して教えており、子どもたちと地域の大人を結びつける役割を持っています。まさにこれが学校と家庭・地域社会が連携して育てる「文教みまたの伝統教育」であると言えます。

平成22年11月24日、「文教みまた子どもサミット」が開催され、町内全児童生徒（約2,600名）が三股町の



▶町には各地区に古くから伝わる棒踊りや奴踊りなどがあり、今も子どもたちへと継承されている。写真は梶山棒踊り。

伝統について話し合いました。その結果、文教三股の歴史と伝統をもとにした三股町児童生徒憲章が制定されました。

町では、三股町児童生徒憲章をもとにして、文教みまたにふさわしい子どもを育てることで、人間性豊かな文教のまちづくりに取り組んでいます。

また、最近は教育用コンピュータの更新、書画カメラや校務支援ソフトの導入など教育の情報化も進めています



▶三股町立文化会館の長期人材育成事業として始まった、小学生から高校生による演劇ワークショップ「みまた座」9期生本公演の様子。

す。

そのほか、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設として、三股町立文化会館が財団法人地域創造による「平成24年度地域創造大賞（総務大臣賞）」を県内で初めて受賞しました。平成13年の開館以来、劇団こふく劇場と連携し、「戯曲講座」「演劇ワークショップ・みまた座」「まちドラ」「開館10周年記念演劇・おはよう、わが町」などを実施し、活力ある地域づくりに貢献したことが評価されました。ここにも、「文教のまち・みまた」の意気が受け継がれています。

アスリートタウンみまた

さらに、近年では、スポーツ振興にも力を入れており、生涯スポーツや競技スポーツ等、様々な面からスポーツ振興を図るため、平成22年度にスポーツ振興計画を策定しました。町民一人一人が、健康で充実した生涯を送ることやスポーツ水準の向上を目的に、子どもも高齢者も、町民誰もが、それ

ぞれの体力や年齢、身体、目的に応じた身近な地域で「いつでも、どこでも、いつまでも」スポーツを楽しむことができるよう「アスリートタウンみまた」の創造」をスローガンに掲げ取り組んでいます。特に、毎年夏に開催する「みまた町民総合スポーツ祭」では、自治公民館対抗のソフトボールをはじめ、グラウンドゴルフ、パークゴルフ、卓球、テニスなど、計16種目を行い、千人を超える参加者が熱戦を繰り広げています。また、誰でも参加できる持



▶ことしの町民総合スポーツ祭の様子（新弓道場にて）。

久走とウォーキングの大会として「チャレンジRUN&ウォーキング大会」も開催しています。持久走の部には、男子の部、女性の部、ファミリーの部など5つの部門を設定し、それぞれにレースを開催、ウォーキングの部門では三股町の自然や景観を楽しみながら参加者全員が7kmの道を歩きます。さらに、同時開催する「地区対抗駅伝」では、9つの地区の小学生から一般までの代表選手が力走し、地域間および世代間の交流促進が図られています。ハード面においても、平成24年に10人立ちが可能な南九州でも有数の広さを誇る県産材をふんだんに使用した町弓道場を新設するなど、「アスリートタウン三股」の基盤づくりを進めています。

自立と協働で創る 元気なまち三股

平成の市町村合併が進められる中、本町は自主自立の道を選択しました。自立の道は決して平坦なものではなく、経済・産業の環境変化、価値観の多様

化、地方分権の進展や地方の財政状況の悪化など町政を取り巻く環境もまた著しく変化しています。このような社会環境の変化や町民の要望を踏まえ、さらに、より良い地域づくりのために、町民と行政、企業、各種団体などのさまざまな活動主体が互いに連携し、協働の意識をもつことが不可欠だと考えます。このようことから、町では「自立と協働で創る 元気なまち 三股」を実現するため、町役場と町民がお互いに創意工夫しながら連携協力してまちづくりを行うルールとして「三



▶「クリーンアップみまた」で清掃作業を行う参加者の皆さん。

股町まちづくり基本条例」を制定し、平成25年6月から施行されました。現在も、町民一人一人がまちづくりの主角として、皆でつくる「まち」を目指してさまざまな活動をしています。

毎年7月には町内一斉の環境美化活動である「クリーンアップみまた」を実施しています。個人で参加される方のほか、ボランティア団体、各種民主団体、スポーツ少年団などが参加し、町内を流れる沖水川の河川敷や公園のごみ拾いなど、各地域で清掃を行っています。平成25年度も7月7日に開催し、67団体950名が参加し、約5トンものごみが集められました。1回の清掃作業で、毎回数トンのごみが集められ、参加者はごみの多さに驚くとともに、力をあわせて取り組むことの大切さを感じる一日となります。

また、町内には多くの自主活動グループやボランティアグループがあります。

上米地区^{かみよね}の20代から30代の若者を中心に構成される「上米棒踊り若武者会」は、三股町の桜の名所である上米公園に冬にも「サクラ」を咲かそうと

▲子育て支援センターにて読み聞かせを行う「読み聞かせボランティアグループおきな木」



平成20年よりイルミネーションの設置を行っています。「地域を盛り上げた」という若者たちの一途な想いで始まったこの試みは、地域の協力で徐々にイルミネーションが増え、輝きを増しています。

子どもを狙った犯罪が増える中、学校のみならず、地域全体で子どもを見守り、安全を確保しようという動きは全国的にも広がりをみせる中、勝岡小学校地区みまもり隊は平成17年に発足しました。以来、児童の登下校時の見守り活動を続けています。同地区から始まったこの活動は、現在、町内の小

学校区全6校区で取り組まれており、町内の防犯意識の高揚に役立っています。

読み聞かせを通して地域の人々とコミュニケーションを図ることを目的として結成された「読み聞かせボランティアグループおきな木」や、町の中心地である「みまたんえき（三股駅）」周辺地域に賑わいを再生させよ



▶三股駅周辺地域ににぎわいを再生させようと集結したグループ（通称「えきにぎ」と公募したボランティアで創りあげた「キャンドルナイト♥みまたんえき」。昨年は8,000個のキャンドルに明かりがともった。

うと様々な想いをもって結集した有志たち（通称「えきにぎ」）、独居高齢者や認知症高齢者を見守る近隣の商店や宅配サービス事業者、急な残業や保護者の病気など少しの間子どもをみてほしいという時などに住民同士で助け合う「ファミリーサポートセンター」など、どのグループも互いに認め合い支えあう地域づくりに貢献しています。

行政としても、毎年、地区別、自治公民館別に町民の皆さんに集まってもらい、座談会を開催しています。町の重点施策、各事業概要の説明、地域の実情を把握しながら、意見・提言を聴くことで、町民と行政が一体となったまちづくりに取り組むよう進めています。

今後「自立と協働で創る 元氣なまち三股」をスローガンに、町民の皆さまとの対話・交流を行いながら、町民目線で町民参画のもと、町政に果敢に挑戦してまいります。

三股町長 木佐貫 辰生

（平成25年8月26日付第2851号）